困難を乗り越えたアスリート⑮

原爆に負けてたまるかと甲子園へ2度導く

元広陵監督の森岡 栄司さん

64回目を迎えた8月6日の広島での平和祈念式典で、秋葉忠利広島市長は核廃絶への誓いを、英語で「Yes we can」と締めくくった。もちろんアメリカのオバマ大統領を意識してのスピーチだが、広島にはオバマ氏より、もっともっと前に「私たちはできる」ことを示した野球人がいた。地元関係者が「原爆監督」と親しみをこめて呼ぶ、元広陵高校野球部監督の森岡栄司さん（77）である。

（新聞うずみ火・吉岡雅史）

上半身から焦げたにおいがした

当時広陵中学1年だった森岡さんは、あの朝、建物疎開ため動員され、爆心地から1・8キロの場所にいた。300人の生徒が4列に整列し、列の先頭だった。

熱線を真正面から受けて、すぐ気を失い、吹き飛ばされた瞬間の記憶はあいまいだという。

「顔と腕、そして上半身と、特に左半分がひどいやけどで、上半身から焦げたにおいがした」

森岡さんは1993年に喉頭がんのため、声帯を切除している。それでも身振りを交え、タケ子夫人の補助を通じて説明してくれた。

傷口からウジがわき大きなケロイドが残る

まともな治療も受けられず、すぐ傷口からウジがわいた。10日後に母親が搬送先に駆けつけたときも、すぐに判別できない状態だった。

まわりの被爆者はバタバタと死んでいく。「自分もいつ死ぬのか」。森岡さんは恐怖を味わい続けた。

広島市のデータでは、爆心地から半径1・2キロ以内にいた人はほぼ半数がその日のうちに死亡。1945年（昭和20年）の年末までに14万人が亡くなった。生存する被爆者は約24万人で、この1年間で死亡した被爆者は6000人近くにのぼる。幸い森岡さんは一命をとりとめたが、動くとすぐ息切れがした。やけどは治っても、あちこちに大きなケロイドは残った。

上級生は兵隊あがりで暴力や猛練習にも耐えた

「体力の限界を確かめたい」との理由から、野球部に入部したのは被爆から4カ月後だった。上級生はみんな兵隊あがりで、「鉄拳制裁は当たり前だった」。森岡さんは、暴力にも猛練習にも耐え抜いた。

「40人いた同級生で、最後まで残ったのは私ひとり」。球児として、夢の甲子園こそあと一歩のところで逃したが、最後はキャプテンも務めた。

「原爆には負けられない」。その一心から、専修大学に進んでも野球を続けた。

けがでレギュラーはつかめなかったが、大学4年になると、監督に請われて二軍監督に就任した。この経験がのちのち生きることになる。

卒業しばらくして広陵野球部監督に

卒業後、野球から離れていたが、64年春にOB会の推薦を受けて32歳で広陵野球部の監督に。

野球のために会社をやめ、飲食店に職を変えて、後輩の指導に明け暮れた。猛ノックを浴びせ、手のマメがつぶれ、血がにじんでもノックバットを振り続けた。

200人いた部員の性格や健康をメモに

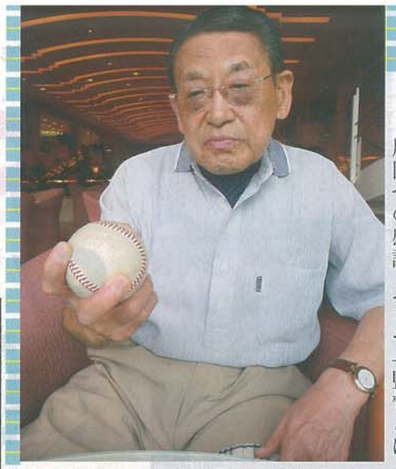
その裏で、200人ほどいた部員全員の性格や健康状態を詳細にメモする配慮も欠かさなかった。さらにその年の選抜で優勝した尾道商業への対策にも余念がなかった。

選手のひとりは「不自由な体にもかかわらず、ボランティア精神で誠心誠意、指導に取り組まれている監督を、私どもも、おのずと信頼するようになりました」と、野球部史で記述している。

船出して3カ月甲子園出場を実現

船出して3カ月。かくして広島大会決勝で、ライバル・尾道商を倒し、最初の夏でいきなり甲子園出場を実現した。入場行進で校名がアナウンスされると涙が出た。1回戦をサヨナラクイズで突破すると、ベスト8まで勝ち進んだ。

「ひとりでは来れなかった」という周囲への感謝。そして「監督とは、多くの人の夢を実現できる仕事なのかもしれない」という喜びを、甲子園は教えてくれた。



「原爆監督」と言われた森岡さん

ちなみに、広島大会の準決勝で前代未聞のハプニングがあった。超高校級のエースで4番の山本浩二を擁する対戦。広陵が着々と得点すると、相手エースはプッツンして、自らマウンドを降りたという。

言わずとしれたのちの〝ミスター赤ヘル〟だが、朴訥とした人柄の山本氏にしては、珍しく荒々しいエピソードである。

話を戻そう。広陵は翌年も夏の広島を制した。甲子園の1回戦で好投手・谷村智啓（のちに阪神―阪急）を擁する報徳学園に0―1で惜敗するも、「向こうはヒット3本。こっちは4本打った」と、森岡さんは負けん気を見せた。

こんな森岡さんのことを、高校野球関係者は敬意をこめて「原爆監督」と呼ぶようになった。

1年半の指導者生活後は原爆症との闘い

2年間で、甲子園へ2度。指導者として最高のスタートを切ったかに思えたが、これまでにない体のだるさを感じ、手足がしびれ、試合後には歯も欠け落ちた。広島に帰ると監督を退任。わずか1年半の指導者生活だった。

退任後は、かつての教え子が毎年集まってくる。話題は甲子園のこと。そして猛練習のこと。「あの経験が社会で生きている」。そう言われたことが何よりうれしい。厳しい練習を通じて、一番教えたかったことが、ちゃんと実を結んだ。

「野球があったから、原爆に勝った」

森岡さんはこの夏も、後輩たちの試合を見に、新しいマツダスタジアムなどへ精力的に足を運んだ。

Yes we can――やればできるんだということを、森岡さんは、野球を通じて示してきた。